

912.3

了

葵上

黑塚

山崎

紅葉

古車

十一

大倉詞

葵上

是乃朱萑院に侍へをなほ下也扱も丸大

乃乃息女葵上の山物守に所に山守の

強に書信高徳と傳へ大法極法醫治療極

極の山守中々山守今丸山守のそと山守

あふ山守大照日此神子と申て山守と持

乃上の山守と申て山守と申て山守と持



行者ら加持に奉んて彼の行者の如く
此心胎金を於る嶺とわび七宝に就て
拂ひ得ぬ入る海と過つる母母乃如衆

赤木此救珠のつたるとどうもくとも

んびをのりていのみ道 東方に

降三世明王曩謨三曼陀縛曰羅南

い舟行者早海り給へ海へてを志給るま

船いありあゑあゑありまゝ行者の法り此

く魚尻と重給て救珠とを疾心 東方

以降三世明王 南方軍地利夜叉

西方大威德明王 北方金剛 北方又明王

中央大聖 不動明王曩謨三曼陀縛曰

羅南施多摩訶嚩提那婆娑婆多耶咄多

羅他漢滿聽我説者得大智慧智我

らうとてふにわろきと出づる人の
くまのし集れ居ゆくは程よお宿り
叶ひの海里上のわろきと出づる人の
めて清奥のわろきと出づる人の
まの俊より移るは我と憐れ一夜の
宿より移るは人里とよきし野人の松
風をたてぬの中へゆくは宿とあはれ

さ夫のわろきの宿りゆく人の
まの宿りゆくは人里とよきし野人の松
風をたてぬの中へゆくは宿とあはれ
めて清奥のわろきと出づる人の
まの俊より移るは我と憐れ一夜の
宿より移るは人里とよきし野人の松
風をたてぬの中へゆくは宿とあはれ

生女

乃露少くは草花菴のせらるるは花の
庭を物に花のたをとおうは

受じ猶重持と申す抱おとる

青たありておよそとならぬ世の人

何とてはれ事いふあはれ月ひら

何とてはれ事いふあはれ月ひら

何とてはれ事いふあはれ月ひら

宿のおゆら情深き秋夜月もあつ

園乃中ハ 麻草花系とらるる麻草

何とてはれ事いふあはれ月ひら

何とてはれ事いふあはれ月ひら

何とてはれ事いふあはれ月ひら

何とてはれ事いふあはれ月ひら

何とてはれ事いふあはれ月ひら

Handwritten text in cursive script, likely a chapter or section header, with red markings above the characters. The text is written on aged, yellowish paper. The characters are dense and connected, typical of traditional Chinese calligraphy. The red markings appear to be small dots or short strokes placed above certain characters, possibly indicating specific tones or characters for emphasis or correction.

Handwritten text in cursive script, continuing the text from the top page. The characters are dense and connected, typical of traditional Chinese calligraphy. The red markings are present throughout the text, following the same pattern as the top page. The paper is aged and yellowish, with some visible texture and slight discoloration.

言部道師の事と此の物なるは和よ人の國

と云ふる言部やと云ふるの （た） 言部やと云ふ

此 （た） 言部やと云ふ此國の申と物の深

よの深くと見事八人の死骸を救ふ守り

と志が移さるる膿血忽ち懸滌く其様

とみらと胞脹く瘡獄とくを烟懐せり

い初是と陰臭る安事と恐の正味に

りる鬼の物也 （た） 此言部やと云ふ

の要する原の正味は鬼をりとはかか

心もかんと （た） 心もゆと肝もきく

命た方と云ふ物た是にゆせと廻てゆ

是に廻てあひえ （た） （た） 言部やと云ふ

見もさうと云ふる國の申とあふぬに

言部道師の事と此の物なるは （た） 胸と云ふ

威陽宮の燈がんとる。此凡山を照らす
雷云猶書天地をくら。空に光り雨乃
夜を。鬼にひらびとて。夜よか楚を
あふ諸杖乃威ひおるのどらるるを
也。東方に海無明王。南方に軍荼利
夜叉明王。西方大威徳明王。北方に令剛
夜叉明王。中央に大智聖不動明王。唵。放

囉。軟荼利摩登耆唵。阿毘羅唵。佉婆
唵。訶。呀。多。羅。他。漢。滿。見我身者發善
提心。因我名者斷惡。修善聽我說者
得大智惠。智我身者即身成佛。即身成
佛。と明王は。集縛にひて。せあふ。ひ。せ。あ。う。を。
初。と。せ。に。の。り。え。あ。の。よ。今。海。に。か。う。も
を。お。く。の。り。と。あ。つ。る。鬼。女。を。海。の。怨。ふ。

系多の付し心いさうあてはひ親のすこ
 年にあうせ緒ひの宿よ善光寺の四系
 わり夜うけの同我と山供中唯と伝
 徳光寺光寺へとあまひ けい 社とあてさ
 波尾志賀の浦舟あれゆくまらぬ乳の
 山越て神の靈あらしむにの宿ひてと
 わる越後の橋や百座をえ 上 宿のまき指原

六河塩うのく 若 安宅乃松念久糖さぬ
 浮乃乃邪とさ心は通乃銀乃筋波結
 中流うからまると越後の河乃事あつと
 ともいそたをあうさうひ河おもも
 けのささ川おも善光寺の 日 中なる宿
 よ是かや越後と越中との塘川よ四系
 あまの是よの善光寺への道較ぬみ

ト云程に⁴雨の人は⁴為⁴は⁴心⁴を⁴中⁴に⁴持⁴て⁴坐⁴す
ちの⁴法⁴の⁴持⁴持⁴する⁴は⁴よ⁴し⁴と⁴云⁴ふ⁴は⁴道⁴下⁴に⁴
わけ⁴持⁴る⁴は⁴心⁴を⁴持⁴持⁴する⁴は⁴よ⁴し⁴と⁴云⁴ふ⁴は⁴道⁴下⁴に⁴
臨⁴臨⁴唯⁴公⁴の⁴持⁴持⁴する⁴は⁴よ⁴し⁴と⁴云⁴ふ⁴は⁴道⁴下⁴に⁴
從⁴山⁴衆⁴物⁴は⁴分⁴つ⁴ぬ⁴也⁴よ⁴し⁴と⁴云⁴ふ⁴は⁴道⁴下⁴に⁴
而⁴方⁴は⁴持⁴持⁴する⁴は⁴よ⁴し⁴と⁴云⁴ふ⁴は⁴道⁴下⁴に⁴
本⁴師⁴の⁴持⁴持⁴する⁴は⁴よ⁴し⁴と⁴云⁴ふ⁴は⁴道⁴下⁴に⁴

あり⁴は⁴持⁴持⁴する⁴は⁴よ⁴し⁴と⁴云⁴ふ⁴は⁴道⁴下⁴に⁴
ふ⁴ら⁴あ⁴り⁴は⁴持⁴持⁴する⁴は⁴よ⁴し⁴と⁴云⁴ふ⁴は⁴道⁴下⁴に⁴
持⁴持⁴する⁴は⁴よ⁴し⁴と⁴云⁴ふ⁴は⁴道⁴下⁴に⁴
あ⁴り⁴は⁴持⁴持⁴する⁴は⁴よ⁴し⁴と⁴云⁴ふ⁴は⁴道⁴下⁴に⁴
日⁴あ⁴り⁴は⁴持⁴持⁴する⁴は⁴よ⁴し⁴と⁴云⁴ふ⁴は⁴道⁴下⁴に⁴
新⁴也⁴は⁴持⁴持⁴する⁴は⁴よ⁴し⁴と⁴云⁴ふ⁴は⁴道⁴下⁴に⁴
而⁴也⁴は⁴持⁴持⁴する⁴は⁴よ⁴し⁴と⁴云⁴ふ⁴は⁴道⁴下⁴に⁴

海よりいそおとちかたは出たり一先此家の

きよきおとちかたは出たり一先此家の

ひそよよ じよらあそりかろく島野玉の

く海をえりり影違出る波網とく合はれも

髪小の荊棘の雲霞裁き 眼容光と

早のあそく いら酒りあら 汝丹塗乃

軒の瓦若鬼のそり 今春らあそり

あそく 何れとらん 鬼一口若ぬ

乃夜よく 律なりゆか死あそり

波思ひ白雲ち何れと同一今も我身の

よみ成ぬ心 浮世さるも飛く所是也

ふりもとくや 善れ秋乃可と冬

おもく 一とく花よ清香月不法是ハ心人の

あそく 花よ清香月不法是ハ心人の

少の松巖トくトくト凡常樂のトとト成ト

下、トきト逆トのトあトらトぬト山ト中トにトあトつトるト

くトもト染ト子トあトれト拜トとト此トあトりトくトらト付トまトとト

中トとト山ト所トにト幽トあトるト法ト性ト筆トのトあトらトハト

上ト乘ト善ト提トとト何トりト下トのトあトらトぬトにト糖トひトらト

下ト化ト危トせトとト表トとト金ト掃ト掃トよトらト下ト掃ト山ト

染トるトせトあトらトぬトとト宿トもトあトらトぬト只ト雲ト水トとト

何トあトらトぬト山トのト奥トもトあトらトぬト手ト物トさトらトぬト

あトらトぬトとトあトらトぬトとトあトらトぬトとトあトらトぬトとトあトらトぬト

自ト性トとト善ト化トとト一ト念ト化ト生トのト鬼ト女トとトあトらトぬト

とト同ト前トのト事ト也ト九ト彩ト心ト一ト如トとトあトらトぬト色ト則ト

是ト中トにトあトらトぬト佛ト法トあトらトぬト世ト法トあトらトぬト如ト佛トあト

あトらトぬト佛トあトれト八ト生トあトらトぬト八ト生トあトらトぬト

八ト生トあトらトぬト八ト生トあトらトぬト八ト生トあトらトぬト八ト生トあトらトぬト

天竺の地味は、
東の地味は、
西の地味は、
南の地味は、
北の地味は、
東の地味は、
西の地味は、
南の地味は、
北の地味は、

神の地味は、
人の地味は、
木の地味は、
水の地味は、
火の地味は、
土の地味は、
空の地味は、
地の地味は、

和歌粘

七上

時毎トなハいクねハ際カりクぬハ山ノ路ト

ねハんトきハあハくハくハ後ハ世ハにハひハたハ

今ハもハなハんハなハれハくハ雲ハはハ八ハ重ハじハらハあハけハ

まハらハ宿ハのハうハみハまハんハあハそハくハ林ハ林ハのハ

さハらハ海ハのハあハらハくハまハりハあハまハもハたハ身ハ念ハ

さハらハひハとハあハらハわハらハうハまハりハさハりハ夕ハまハあハらハくハ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

ゆゑとあつてはかれとてはあつては
さへなるひ出た道野へのまはりのま
日たさひく昔下は葉が秋をまのま
深はんく昔わいの原をほひよりのま
さくまな井とさひりされさくまなま
何に風うひまはさくまなまは
おまるとわくさく錦中あんとまら

の幸なきらしてはかれ指とあつては
屋らみゆへ越弓あやばらま月九日わ
ゆりゆかれとてあつては錦とら
らる夕何あわれまは麻のひらのま
あゆらうりまのまをまありあけ
あはれ中あはれ中あはれ中あはれ中
ゆりゆかれとてあつては錦とら

母を懐てこひ給へ行と競との母がた
さあかりぬきぬんよ付てらえおれは橋の
方へ乃程面もい通りよを乃ちかた
何ははるあけさいりえうむらひ去の車と
化つてはぬまらめつるゆもい清よわむ
海へまゝいりて海為めく社ひくさぬに
おしよるいりてあつちいりたあらのあえら

捨棄せらるるはひ 見 屋の乳母今いり
あひえ 何とてあひいりあつちいりあえ
は痛りやの捨棄せらるるともは焼あてら
昔えさしありあつちいりあひいり
あつちいりあえはひ公安く思はせし
痛りやあつちいりあつちいりあつちいり
あつちいりあつちいりあつちいりあつちいり

藤てぐ成海く成ぬき月 僅な
於露乃命とさるきんと天下念佛ノ報
と打神成ひらけ物とを同上心証人の
わられまはく切事教又の行ふ成か
ふとたなせ結へとらあなうらうにほ
ふえと思ひあうもうに様と信法
團よびある普光寺おも長よりり

く 何と云わちん叶ふ海ひのらや
悲まがう高これ私うてせに結つ
さうわらふ公乃團えう見洲附天香
乃清字うまよ子方と云う送信者
伊賀伊珠乃境よらもの居く見其
かまらひひあうとに人か鬼成
ふひ六貴とさやうもなるうに

藤原の朝臣群とあつて鬼乃城よ
一着乃身と送り其身はいつくまも
本も我ちなる國をまへにゆく鬼の
宿と定めん 此奇の理よく鬼も
めそらりあれ六千方も亡ひて一
日無波とらあさめ行く八國も動く
ぬ鑛の地の車は強き道びらせらる

ぬちなるみひの國を身を六獨ちる
珠文膏圓信法結や 本尊
乃撈ひて実ふのともあやうかぬ法の
声なきが法入る憐れたの力りや
物とらる佛の見えひもあまのくあや
ま也強へんあまの仲りも決あ
そらんあに佛の底よとてあそ

みれば使さるの御うて名乗る様も
しやと云ひながら何ともおやうな
恩恵の御ことごとく憐れと云ふ事
口惜さるの能く物と案と何と云ふ
と云ふ六種の御今違ふの御心
御心三尊の御と案と云ふ御心
南無阿彌陀佛と唱へて云ふ御心

行ふらく 見 けり乳母今も命も
くは前も何よ力を投やと云ふ
と云ふ思ひの御心御心御心
御心御心御心御心御心御心
此如来堂の佛前に御心御心御心
世菩提の事と云ふ御心御心御心
御心御心御心御心御心御心

しつらめての^上と^上ま^上せ^上氣^上痛^上也^上
根^上源^上と^上事^上の^上に^上有^上相^上執^上志^上の^上妄^上念^上よ
に^上ま^上り^上り^上の^上事^上と^上ん^上よ^上海^上の^上心^上
流^上轉^上む^上ら^上ん^上て^上。車^上の^上場^上に^上め^上り^上
く^上あ^上る^上羅^上陀^上を^上定^上め^上る^上鳥^上乃^上林^上よ
わ^上ら^上ぬ^上に^上あ^上る^上決^上。料^上の^上心^上を^上我^上
お^上今^上人^上界^上に^上せ^上ば^上ら^上ん^上ら^上ん^上ら^上ん^上ら^上ん^上ら^上ん^上

^甲見^上仏^上因^上法^上乃^上結^上縁^上と^上も^上あ^上る^上れ^上。末^上
来^上れ^上の^上こ^上も^上い^上ふ^上と^上い^上ふ^上志^上も^上い^上ふ^上の^上也^上
^甲元^上の^上悲^上願^上を^上破^上戒^上圍^上提^上と^上も
り^上ま^上り^上念^上十^上念^上の^上因^上に^上依^上因^上に^上ひ^上く
ら^上ん^上と^上い^上ふ^上初^上思^上唯^上乃^上奉^上願^上あり^上す
と^上い^上ふ^上也^上其^上心^上ヲ^上極^上重^上惡^上人^上無^上他^上方^上
便^上唯^上精^上淨^上施^上侍^上生^上極^上樂^上と^上ら^上ん^上ら^上ん^上

を山に引りて住せしに我とあまの
りもせし 文 恩日まらむと云ふ
ハ家あり門よりあまを投せしと云ふ
ありとわあを引く 文 恩日まらむと云ふ
さみち親より申されし又ひんせし心
かきく門前よりあまを引く 文 恩日まらむと云ふ
や河も引付りて二人を西より打ちまらむ

あまの身をとりて引まらむ 文 あま

あまの身をとりて引まらむ 文 あま

あまの身をとりて引まらむ 文 あま

あまの身をとりて引まらむ 文 あま

あまの身をとりて引まらむ 文 あま

あまの身をとりて引まらむ 文 あま

あまの身をとりて引まらむ 文 あま

